30

# 「樗雑集」における口腔部門の研究

戸出一郎

「樗雑集」は、京都の医家百々家旧蔵の医書で、明治二三年、同家から京都大学附属図書館に寄贈されたものである。本書は近年某出版社から影印出版されたので、このたびこの影印本を資料として、本書の口腔疾患に関する部門について検討した。

検討に当っては、中国の漢代から明初に至る主要医書並に我国の医心方・頓医抄・啓迪集・口科叢書と比較して、本書における引用書目を推定し、同時に医説の性格についても検討を加えた。本文が他書からの引用であるか否かは、本文に明記されている場合の他は、文体・処方名・処方内容・用法並に列記の順序等を比較して推定した。文献名が本文中に或は頭註として明記されているものは比較的少数で、大部分は記されていないような印象を受けた。

口腔疾患は咽喉門・口舌病附唇・牙歯門に分類され、各部門とも冒頭に医説があり、次いで治方が列記されている。

咽喉門における医説は「奇效良方」「玉機微義」「医学正伝」「諸病源候論」「医林類証集要」(以下「奇效」「玉機」「正伝」「病源」「医林」)から引用されている。医説のうち喉痺に関する部分は「奇效」と全く同文で、病形も同様に一八形に分類されている。

治法は方書の形をとり、処方が列記されている。処方数は六二に及び、そのうち引用と推定される主な書名と処方数は「奇效」一三、「医林」一一である。引用に当っては単なる模写でなく、部分的に編者による取捨訂正が加えられている。なお引用不明の処方は三四方あった。

口舌病附唇は一門として扱われ、冒頭に五行説による症候分類と適応処方が記されているが、これは「正伝」の引用であろう。治法では「奇效」の引用が最も多く、全五六方中三六方あり、他に「医林」九方、「正伝」八方が認められた。

牙歯門では、冒頭に「奇效」より引用された医説が二〇行にわたって述べられている。この医説の前半は、もともと「蘭室秘蔵」にあったものが東垣日と前置きをして「奇效」に引用されたものである。「樗雑集」における医説は、先ず「霊枢」経脈篇による歯牙と歯肉への経絡の走行と寒熱による病症を述べ、更に「病源」の医説を加味して歯牙疾患の病理・病症を説明している。治方は全部で七六方あり、そのうち「玉機」からの引用が一八方、「奇效」一五方、「医林」九方その他である。

牙歯門で特記すべきことは、「玉機」から引用された薬方のうち一三方に帰経、即ちその薬方がどの経絡に作用するかが明記されていることである。当時の医書でこれがあるのは「玉機」と「樗雑集」のみであろう。帰経の記録は口腔以外の領域でも散見される。

右のように「樗雑集」は（口腔領域のみに関する知見であるが）、医説・治法ともに中国の医書からの引用による部分が多く、引用文献は漢代から明初に及び、中でも「奇效」「医林」「玉機」「正伝」からの引用が最も多く見られた。この四書はいずれも明代初期に刊行された医学全書で、金元時代の劉・張・李・朱の医説の影響を強く受け、「内経」医学の経絡説や陰陽五行説を軸とし、金元時代に創造された医学理論を集大成して世に広めたものである。我国における後世派の誕生は彼等の業績に負う所が大きいが、「樗雑集」はこのような背景のもとに編纂された医書であると思われる。

なお「医心方」「頓医抄」には「樗雑集」と類似の処方が数方あったが、相互の密接な関係は見出されなかった。しかし「啓迪集」と「口科叢書」には類似点が多く、この点に関しては今後の研究課題としたい。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）